

『*Little Women*—Louisaの“gift”観—』

(*Little Women*—Louisa’s Idea of “gift”—)

太田直子
OHTA, Naoko

I

Louisa May Alcott (1823-1888) の一家がモデルである *Little Women; or Meg, Jo, Beth and Amy* は、“*Little Women* was deemed as early work of ‘domestic realism’ in the canon of American literature.”¹⁾ と、アメリカ小説の新しい形を創り上げた作品と考えられている。しかし、1868年の出版時、世界中の少女の愛読書としてこれ程長い間読み続けられることを誰が予測したであろうか。作品を読み進めていくと、読者は主人公 Joe March と作者 Louisa Alcott を同化させ、現実とフィクションの境を見失っていく。Louisa の実生活のあまりにも過酷な現実とそれに立ち向かう彼女の秘められた強い信念と欲望が、作品の中での非現実的な出来事をリアルなものにしている。

Louisa の父 Amos Bronson Alcott (1799-1888) は、現在は “the father of *Little Women*” としてその名をとどめているが、19世紀アメリカにおいては、教育者、哲学者、そして Transcendentalist として活躍をした人物である。理想的な教育を求めてその人生のすべてを費やした Bronson の一生は、常に彼を取り巻く人々を巻き込んでいく。1835年に Bronson に会い、“He is a world-builder”²⁾ とその才能を認めていた Ralph Waldo Emerson も、彼に巻き込まれた一人であった。父権社会であった当時のアメリカの家庭では、理想のみを追い求めていく父親の言動を妨げることはできず、家族はそれに耐えながらそして正当化して生活を送らなくてはならなかった。

May, 1868. — Father saw Mr. Niles about a fairy book. Mr. N. wants a *girls’* story, and I begin “*Little Women.*” Marmee, Anna, and May all approve my plan. So I plod away, though I don’t enjoy this sort of thing. Never liked girls or knew many, except my sister; but our queer plays and experiences may prove interesting, though I doubt it.³⁾

少女のための本には全く興味をもっていなかった Louisa であったが、“plain stories for boys and girls about childish victories over selfishness and anger.”⁴⁾ の必要性を長年問い続けながらも、自らそれを実現することができなかった父 Bronson の希望に添うように、*Little Women* は “the hidden emotional currents of her life”⁵⁾ を使って書き上げられた。家族愛だけではなく “dangerous family disaffection” を体にしみこませていた Louisa は、彼女の唯一の慰めでもあった “imagination” を駆使して作品を書いていったといえよう。出版された作品は好評になり、翌年 Louisa は物語の続き Part II を書き上げ、現在の *Little Women* は、Part I と Part II から構成されている。そのため、作品に対する意図が Part II においては微妙に変化していることがわかる。Louisa の化身ともいわれる次女 Jo の生き方も、Part II では大きく異なる。

Little Women には随所に “gift” についての描写が出てくるが、Jo の生き様が Part I と II とで異なっていたように、“gift” についても概念が異なっていることに気がつく。*Little Women* は単なる少女のための小説ではなく、Louisa May Alcott の育った Alcott 家の現実と理想、そしてそれに苦悩した Louisa の歪んだ価値観の表象と仮定し、さらに “gift” の概念が育った環境と大きく関わりをもつことから、Alcott 家、特に父 Bronson の価値観を考察して、作品の中で “gift” を常に与える立場である Aunt March を中心に作品を分析し、作者 Louisa の求める幸せを考察したい。

II

Louisa の父 Amos Bronson Alcott は、1799 年、Connecticut 州に Joseph Alcox と Anna Bronson Alcox の長男として生まれた。貧しい一家に生まれたために、Bronson は母方の伯父 the Reverend Tillotson Bronson に引き取られ学校に通うことになるが、都会での学校になじめず一ヶ月で故郷 Spindle Hills に戻ってくる。教師になりたかった Bronson は、1818 年 10 月に、南部で北部人の教師を必要としていることを知り、Virginia へ出かけていくが採用されず、“Yankee Pedders” として 5 年過ごすことになる。南部で放浪しながら Dabney, Nelson, Tabb, Jalliaferro 家など、いわゆる南部貴族と呼ばれる一族に助けられる。その裕福な環境を肌で感じるようになると、“hereditary aristocrats” の環境こそが自分に最も適していると思ひ込み、Connecticut 訛りをなおし、“Virginians Landowner” のように振る舞うようになる。Bronson は奴隷解放を唱える人物として当時急進的な役割を果たしている一方、常に南部の有閑生活に憧れをいただいており、その生活が奴隷制度の上に成り立っていることも意識していたという。南部を旅する生活で借金がふくれあがり、彼の借金返済のために父 Joseph は農場を売却する。自らの借金を返済するために遮二無二働くこともなく、23 歳で一文無しになった Bronson は、その後も借金を繰り返し、常に彼を取り巻く人間に助けられそれに依存していく。その姿は日常を超越した天才的な存在にも思えるが、人格的・性格的にどこか欠落した人間と考えられる。

伯父Tillostonの世話になり、ConnecticutのCheshireの公立小学校で教師の職を得た時、彼は田舎くさい名字AlcoxをAlcottと変え、教育者A. Bronson Alcottとしての人生が始まる。Bronsonは理想に燃えた人物であった。ヨーロッパの教育者・哲学者Robert Owen, William Russellに影響を受けた彼の目標は、“to establish the reign of truth and reason and arrange society—our systems of education—in accordance with the laws of our nature as we find it in its incipient state.”⁶⁾であった。理想と現実はかみ合わず、あまりにも熱心すぎる彼の指導法は親から不評で、そのために生徒数が減少し学校は閉鎖される。借金とともに学校の創設・閉鎖は繰り返され、そのたびに家族は巻き込まれていく。

1827年夏、Bronsonは将来の妻Abigail (Abby) May (1800-1877)と出会う。Abby Mayは、成功した実業家Colonel Joseph MayとDorothy Sewell Mayの娘として生まれた。母方のSwell家は、1770年に反奴隷制を訴えたSamuel Swellの末裔である。10代で従兄弟のSamuel May Frothinghamと婚約するが、1819年に婚約者が突然死に、その後、姉、母も死亡して一人残されてしまう。さらに、1826年母の死の一年後、父が39歳のMary Ann Caryと再婚したことで、婚期を逃したAbbyは親戚の間を渡り歩いて生活し、その時、Bronsonに出会った。

新しい教育論を振りかざすBronsonはAbbyの周りには存在しないタイプの男性であり、その教育論に共鳴したAbbyはBronsonと結婚することになる。“a man of the world; practical, shrewd, eminently sane.”⁷⁾であるColonel Mayが、“a dreamer, a visionary, who did not so much scorn money”⁸⁾な男を最愛の娘の夫として認めることはできなかった。しかし、Bronsonの何度も繰り返された訪問によって、1830年5月22日、二人はようやく結婚することになった。

結婚生活は困難の連続であった。新婚当時、Bronsonはすでに700ドルの借金があり、さらに結婚後Abbyはすぐに妊娠する。繰り返される夫の借金と、30歳から40歳までの8回の妊娠と、結婚生活は想像を絶するものであるが、Abbyは夫の理想を共に追い求めていくことを自分の生きる道と考え、彼に追随していく。結婚後最初の窮状は、匿名のwell-wisherからの2,000ドルの援助により危機を脱するのであるが、その送り主はAbbyの父であった。贈られた2,000ドルで700ドルの借金を返済し、Quaker教徒のReuben Hainesの援助を受けて、Pennsylvaniaで学校を開設する。1831年3月16日、長女Anna Bronson Alcottが生まれ、そしてその18ヶ月後、1821年11月19日、父Bronsonと同じ誕生日に次女Louisa May Alcottが誕生する。子供二人が誕生したが、Bronsonの学校は、パトロンであるHainesの突然の死によって経営が悪化し、さらに、夫婦の関係も悪くなっていく。1834年に三女Elizabethが誕生するが、その後、Abbyは流産を繰り返す。

William Channing (1780-1842)の経済的協力を得て、BronsonはBostonでTemple Schoolを始めることになる。Transcendentalismの信念に基づくこの学校は、Elizabeth Peabody, Margaret Fullerらの助けを借りて次第に良い評判を得るようになる。Ralph Waldo Emersonもこの学校の良き理解者となり、この頃からBronsonはTranscendentalistとしてConcordの

人々と深いつながりを持つことになる。しかし、平安な時間は長く続かなかった。学校方針をめぐる意見の相違、そしてM. FullerとAbbyの確執、Bronsonを取り巻く女性間には様々な争いが生じていた。さらに、黒人生徒の受け入れの是非を巡って生徒数が減少し、学校経営は破綻し1839年に閉校となる。1839年のこの時から死亡するまで、Bronsonは定期的な収入を得ることはなくなり、哲学者・教育者としての誇りと理想だけは高く掲げながらも、実生活を保持し、維持する能力はなかった。こうした父Bronsonのもとで成長したLouisaは、物心つく頃から常に貧乏であった。Abbyは父Colonel Mayや兄Sam Mayを頼り、そしてBronsonの理解者であったEmersonはその暮らしぶりをみかねて援助の手を差し伸べた。

Concordの哲人と呼ばれたEmersonは、当時Concordに居を構え、彼を慕って集まってきた哲学者たちを周りに住ませ、哲学者の理想の町を作り上げようとした。自分の思想を立証し、実践する人々を周りに置くことを好んだEmersonは、Nathaniel Hawthorneとその妻Sophia Peabodyに“the Old Manse”⁹⁾を使用することを許し、Henry David ThoreauにはWalden Pondのそばの土地を、小屋を建てる敷地として提供した。そして、他の誰よりもBronsonに対して多くのものを提供している。

...he would shore up and subsidize Bronson Alcott the most, opening doors to influential people, giving him work and regular gifts of money, even cosigning loans and volunteering to hold title to property Alcott lived on when his newly acquired socialist principles prohibited it. To get him to come to Concord, he paid Alcott's fifty-two-dollar annual rent for Dove Cottage as part of a plan for him “to get his living by the help of god and his own spade” as a farmer-philosopher,¹⁰⁾

友人に援助(subsidizing)するEmersonの行為は、彼の“economic sense”を示している。“...it bought their intellects for his benefit and afforded them the freedom to develop theirs.”¹¹⁾ このEmersonの好意に対して、依存する体質のBronsonはもちろん彼の好意を喜んで受け入れたが、Abbyは必ずしもそうではなかった。むしろ抵抗を示した。

Emersonは人に与える“gift”について次のように語っている。

Rings and other jewels are not gifts, but apologies for gifts. The only gift is a portion of thyself. Thou must bleed for me. Therefore the poet brings his poem; the shepherd, his lamb; the farmer, corn; the miner, a gem; the sailor, coral and shells; the painter, his picture; the girl, a handkerchief of her own sewing.¹²⁾

Emersonは、自分がAlcottに与える“gift”は人間としての基本的な生活の基礎を与えることであり、それによって彼の才能を開花させることができると考えていた。前妻の遺産に

よって安定した生活を手に入れたEmersonは、“Newness”¹³⁾を樹立するために人々を集め、そしてAlcott一家も1840年3月31日にBostonからConcordに移り住んだ。

Emersonが新しいコミュニティの長としてその地位を確立するために、そして自分の思想を実践させるために共鳴する人を集めたというこの事実を、彼の“gift”としてとらえるとするならば、いわゆるMarcel Maussのいう「ポトラッチ」(Potlatch)¹⁴⁾と共通するものがあるのではないか。

コミュニティが形成される時、その政治的地位は競争と敵対によって決まる。そしてコミュニティの包摂する契約を締結するためには、給付が存在する。給付、つまりポトラッチにより、そのコミュニティの政治的地位は確立される。ポトラッチによる贈り物は、任意的な形式によって行われが、しかしそれはある意味においてそれは義務的なものであり、そして受け取った者には、返礼の義務が生じるのである。

コミュニティの長となるEmersonは、ポトラッチによりその政治的地位を確立し、それに呼応する人々はtranscendentalism思想の実践者としての役割を果たすことにおいて、その返礼の義務を強いられたことになる。もちろんBronsonはこの構図を認識することはなく、ただ尊敬するEmersonのポトラッチ・giftを自分に与えられた当然の権利で名誉として受け取った。一方、Abbyは夫とは異なり、Emersonの“gift”に対して抵抗を見せている。彼女はEmersonではなく、彼の妻に対する嫉妬、つまりはその支配力に対して抵抗していた。

Emersonは長男を亡くした後、Bronsonの渡英を計画しその経済的支援を申し出る。ポトラッチを強化していった理由は明らかではないが、その支援にも関わらず、ConcordのDove Cottage¹⁵⁾のAlcottの生活は実に苦しいものであった。生活苦からAbbyは何度も実家の兄に手紙を書き、お金を要求している。帰国後BronsonはCharles Laneと新しい村Fruitlandsを計画・経営することになりConcordを去る。そのためには積み積もった借金を支払わなくてはならなかった。やはり頼るのはAbbyの兄Sam Mayである。Samは妹に、どうしてBronsonが友人の助けなしでは家族を養っていけないのか問いかけ、必ずしも妹の要求通りにお金を渡すことはなかった。借金の返済を自力で行う努力をしない夫に対する不満と、幾度と繰り返される兄へのお金の無心は、Abbyを精神的に追い込んでいく。唯一彼女の心の叫びの慰めになったのが、10歳になったばかりのLouisaであった。¹⁶⁾ Louisaは幼くして母の惨めな姿と父の生活力のなさを身にしみていくのである。Alcott家の再出発のために救いの手をさしのべたのはまたEmersonであった。彼はAbbyの兄に相談し、借金の返済と新しい土地と家の購入のための保証人となった。

新しい土地に移っても生活は変わらなかった。結局、Fruitlandsは失敗に終わり、一家はConcordに帰ってくることになるが、これは、Emersonからの“gift”を受け入れることをAbbyも容認したことを示すものである。

Bronsonは自分に与えられた“gift”を簡単に受け入れ、ポトラッチに対する返礼の義務

を認識できない人物であったが、返礼の義務を認識している妻 Abby は、何も返すことができない惨めさに耐えかね、Emerson を長とする Concord の束縛からの解放を望んでいた。しかし、実益を理解できない夫と、夫とともに新しいコミュニティーを模索した Lane に対する不信感から、やはり、Emerson の Bronson に与える影響力の大きさを実感する。¹⁷⁾ 返礼の義務に思い悩むよりもポトラッチによって与えられるコミュニティーに帰属する方が、夫に多くの価値をもたらすということに Abby は気がついた。彼女は自ら出稼ぎにも出かけて生活費を稼いでいたが、一家を支えることができないところまでくると実家に頼るしか方法はなかった。血族間で交わされる“gift”は、Emerson らの友人によるそれとはまったく異なるものであると Abby は考えていた。実家による援助を当然の権利としてとらえていたことがわかる。

1841年2月、Abbyの父が死に遺産が分配された。Colonel May は自分の財産を7等分にして、当時存命だった3人の子供 Sam、Abby、Charles、そしてすでに死亡していた3人の娘 Catherine、Elizabeth、Louisa の子供たちに、そして養女の Louisa Caroline Greenwood に分配した。彼女が受け取ったのは“a little over two thousand dollars and a handful of treasures from Federal Court, her mother’s silver teapot”¹⁸⁾であり、父が最も愛した一番下の娘として自分に相当の財産が残されると確信していた Abby は、父の遺言に対して“My father...did not love me,”¹⁹⁾と嘆いている。さらに、Colonel May は不甲斐ない娘の夫に対する不信感から、Bronson の借金の債権者から Abby のお金を守るために、彼女の兄と従兄弟 Sam Sewall に遺産を凍結するように指示していた。娘としての当然の権利を制限されたことを父の愛を疑うことでしか理解することができなくなってしまった Abby の姿は、“gift”に対する彼女の歪んだ理解を示しているといえよう。

夫の借財に対する責任まで背負い、さらに妻・母としての duty を全うすることに全力を傾けていた Abby の人生を、身近に常に敏感に感じ取っていた Louisa は、少女とは思えない“money”に対する執着を持ち、家族に対する義務を背負って成長していく。自分の家族の形に疑問をもちながらも、それを肯定して生活することしかできなかった Louisa の自尊心が、money ではなく、家族愛に満ちあふれた温かい家族ことが幸せの最も理想的な形であると訴える *Little Women* の執筆につながった。そして Louisa の実生活では考えられない“gift”の発想が描かれていくのである。

III

Little Women の登場人物には、それぞれモデルがいて、それが誰なのかと様々な論点から研究されてきた。Louisa も次のように書いている。

“Little Women” — the early plays and experiences; Beth’s death, Jo’s literary and Amy’s

artistic experience; Meg’s happy home; John Brooke and his death. Demi’s character — Mr. March did not go to war, but Jo did. Mrs. March is all true, only not half good enough. Laurie is not an American boy though every lad I ever knew claims the character. He was a Polish boy, met abroad in 1865. Mr. Laurence is my Grandfather, Col. J. May. Aunt March is no one.²⁰⁾ (下線部筆者)

“Aunt March is no one.” とあるが、作品の中での彼女の役割は大きい。“‘Christmas won’t be Christmas without any presents,’ ”²¹⁾ という Jo の言葉で始まる *Little Women* Part I は、お金がなくて贈り物のない寂しいクリスマスを迎えるであろう March の 4 姉妹、Meg、Jo、Beth、Amy の会話で始まる。冒頭から家族以外で言及されるのが Aunt March であり、*Little Women* の Part I の最終章 “Aunt March Settles the Question” は彼女がこの章の鍵を握っている。そして、作品の中で Alcott 家と March 家に共通する難題 “money” と “gift” が話題になる時に必ず登場するのも、Aunt March であり、姉妹の未来への希望も彼女によってもたらされるのである。

Aunt March は名字から March 家の父方の親戚であることがわかる。夫を亡くし、一人で大きな邸宅に住んでいること以外、Aunt March の詳細は記されていない。死亡した夫 Uncle March の社会的地位も不明である。Part II で Mr. March のことを “nephew” と呼んでいることから、姉妹にとっては大伯母に当たることが後にわかる。父方の親戚を金持ちと設定し、“...we had the money papa lost when we were little.” (8) という長女 Meg の話からも、数年前までは March 家もそれなりの財産があったと設定していることが分かる。財産を無くした理由は、不幸な友人を助けようとしたためとされているが、Louisa が父方の親戚を裕福に設定したことは興味深い。逆に、母をモデルにした慈愛に満ちた理想的な女性 Mrs. March の親戚についてはほぼ明記されず、ただ一回、隣家の Mr. Laurence と彼女の父が旧知の仲であり、彼について話すのがうれしいことが記されているだけで、詳細どころかその存在をも明らかにされていない。これは非常に不自然といわざるをえない。実生活のコンプレックスをかなり意識して、意図的に設定された構図だと考えられないだろうか。

クリスマスにもプレゼントを交換することもできない程の貧乏で、おまけに世帯主の父は南北戦争で留守である。貧乏な March 家の危機に常に救いの手をさしのべてきたのが、Aunt March である。金銭的に最も頼りになる存在であり、新年に姉妹一人ずつに手渡される 25 ドルのプレゼントは彼女らの唯一の楽しみであり、頼みの綱である。子供のいない Aunt March は、財産を無くした March 家に 4 姉妹の一人を養女にして援助することを申し入れた。当然 March 夫妻はこの申し出を断るのであるが、養女と援助といういわば身内間のある種の取引は否定されることになり “gift” と返礼の関係が成立しない。Aunt March と March 家の関係はこれをもって一時途絶えることになった。しかし、その関係は Jo の存在によって復活する。

ある時、友人宅で Aunt March は Jo と再会して彼女の “her comical face and blunt manners” (45) を気に入り、再び親戚つきあいを開始する。足が悪く、支えてくれる行動的な人を必要としていた Aunt March には、tom-cat である Jo が必要であった。そして伯母の家にある伯父の書斎を始め、自らの楽しみを満たしてくれる伯母の家に Jo も魅力を感じていた。求め合うものを各々が持っていることで、二人が平等な関係であると主張するとともに、Louisa は “A quick temper, sharp tongue, and restless spirit” な Jo と “an occasional tempest” な伯母の相性の良さをさらに理由として、この二人が実によく似た者同士であることを強調している。

しかし、文句を言われながらも、伯母の家には彼女の楽しみがあり、そして相手役として何かしらの賃金を受け取るというこの関係は、受け取る側、Jo の利益度の方が明らかに大きい。その不均衡な関係は、“her usual hospitality” (191) と呼ばれている彼女の姉妹に対する「嫌み」が強調されることにより、gift・返礼の関係が対等であるかのように読者に錯覚させる。March 姉妹に口うるさいと敬遠される Aunt March は、常に見えないところで March 家の支えとなり、苦しい毎日の生活の中で、姉妹の自由なお金は、皮肉にもうとうしい伯母から与えられているのである。

March 家の女性たちは、母親を中心として貧しい人々に尽くすことを美德とし、献身的に取り組んでいる。見返りを求めることなく、与え続けることを “duty” として崇めることで March 家の社会的価値が見いだされている。密に行われるこの奉仕の精神の見返りは、隣家 Laurence によってもたらされる。

There was ice cream, actually two dishes of it, — pink and white, — and cake, and fruit, and distracting French bonbons, and in the middle of the table four great bouquets of hot-house flowers! (28–29)

贅沢な物が食卓に並べられていることの幸せを素直に喜ぶ姉妹であるが、このサプライズをみて、“‘Aunt March had a good fit, and sent the supper;’” (29) と Jo が叫ぶ。贅沢はすなわち Aunt March からの贈り物であるという固定された考えがこの姉妹の中にあり、それはすなわちこの一家が伯母に依存していることを示している。Aunt March からの “gift” は当然のこととして考えているが、March 家が “gift” に対する返礼義務を果たす一家であるということを、Louisa は作品の中で説明していく。

サプライズの食事をきっかけに、Jo と Laurie を中心に March 家と Laurence 家は交流をはじめ。姉妹は、それぞれの憧れと夢を果たしてくれる Laurence 家の持ち物に心奪われ、隣家へ出入りをする。Laurence 家からの “gift” に対する「お返し」について Louisa が意識していることがわかる。

...the fact that they were poor and Laurie rich; for this made them shy of accepting favors which they could not return. But after a while they found that he considered them the benefactors, and could not do enough to show how grateful he was for Mrs. March's motherly welcome, their cheerful society, and the comfort he took in that humble home of theirs; so they soon forgot their pride, and interchanged kindnesses without stopping to think which was the greater. (66)

貧乏なMarch家の“gift”は、家族愛・慈しみであるとLouisaは説明している。形のないこの返礼が繰り返されても、実社会ではそれだけで関係を継続することはできない。その証拠に姉妹の友人がLaurence家とMarch家の関係をねたみ、Mrs. Marchの策略がその裏に存在すると噂しあう。実社会ではありえないgift・返礼の形をあくまでも正当化して理想化しながらLouisaは書き続けていることがわかる。

March家がrich-poorの関係である相手に対して、形のあるものを示した場面が一つだけある。三女BethのMr. Laurenceへのプレゼントである。姉妹で一番気弱なBethがLaurence家のピアノを弾きに行くことができないことを聞きつけたMr. Laurenceは、Bethに自宅のグランドピアノを弾きにくることを優しく促し、彼女は思う存分に豪華なピアノを楽しむことができた。彼の好意に対して、Bethは“...I'm going to work Mr. Laurence a pair of slippers. He is so kind to me I must thank him, and I don't know any other way.” (69) と手作りのスリッパをもって感謝の意を伝えることになった。BethのMr. Laurence氏への“gift”はまさしくEmersonがいう“gift”の概念に当てはまるものである。

数日たって、BethにMr. Laurenceから孫娘が使っていたピアノが届けられ、そして手紙が添えられていた。

“I have had many pairs of slippers in my life, but I never had any that suited me so well as yours, . . .” “Heart's-ease is my favorite flower, and there well always remind me of the gentle giver. I like to pay my debts, so I know you will allow “the old gentleman” to send you something which once belonged to the little granddaughter he lost. With hearty thanks, and best wishes, I remain,

“Your grateful friend and humble servant,

“JAMES LAURENCE” (71)

少女の純粋な気持ちから出たこのささやかな“gift”は、気むずかしい老人の心を深く動かし、その後の両家の関係を固定する十分な理由付けとなっている。

この手紙に、作者Louisaの意図が隠されていることがわかる。“pay my debts”という言葉には、Mr. Laurenceの返礼以上の強い意識が感じられる。裕福な者の好意に対する少女の

返礼を、Mr. Laurence氏は“gift”と受け取り、そして、彼は豪華な品による返礼をおこなっている。社会的そして金銭的にも優位に立っている者は、自分の好意に対する返礼を受けても、それで終わることなくさらに返礼をおこなう。つまり、常に相手に与えた状態で終結する。これが作品の中でLouisaが描く社会的格差間で取り交わされるgift-返礼の形なのである。JoがLaurence家の書斎で自ら満喫している様子が描かれているように、実生活において、LouisaもEmersonから書斎に出入りすることを許可されているが、それに対するLouisaの返礼の記録はない。LouisaがEmersonの娘に妖精物語を書いてあげたという誇らしげな記録が残っているが、LouisaからEmersonへの“gift”の事実は記載されていない。作品の中でも、姉妹は、Mr. Laurenceの恩恵を受けているが、実際に行動を起こしたのはBethだけである。Bethの純粋な気持を象徴する美しい“gift”であるが、このMr. Laurenceの手紙の“pay my debts”は、Louisaの裕福な者のgift-返礼の義務の認識を表しているのである。しかし、裕福な者からの“gift”がすべて当然のように受け入れられ、必ずしも返礼を要求するものではないというこの認識は、一度だけ*Little Women*の中で否定されている。

父が戦場で病気になったと電報を受け取ったMrs. Marchは、すぐにJoに手紙を持たせAunt Marchのところに行くように伝える。もちろんお金の無心である。この場面は、作品の中でもJoの気質を最もよく表しており、彼女のプライドの高さ、責任力の強さに読者が魅了される場所である。いつも邪険にされているAunt Marchに一矢報いるというJoの行動に、忸怩たる思いで同情していた読者も胸のすく思いをする。そして、“I hate to borrow as much as mother does, . . .” (173) は、まさしくLouisa自身の叫びである。父の借金に苦しむ母の姿を目の当たりにしていたLouisaは、身内からお金を受け取る母の姿を間近で見ていたであろう。自分の髪を売り作った25ドルを手渡すJoに、驚きながらも感謝する母、帰宅後、“I couldn't find anything beautiful enough to be bought with the five-and-twenty dollars which my good gift sent me.” (234) と感謝する父の言葉など、まさしくJoは一家の窮状を救う希望として描かれている。しかし、Joは使いに出たままなかなか帰宅せず、代わりに、LaurieがAunt Marchから現金を受け取っている。不信も戒めも哀れみもすべて受け止め、それでもお金を求めなくてはいけないその苦しみは、LaurieがもってきたAunt Marchからのお金とメッセージを受け取った母の“Mrs. March put the note in the fire, the money in her purse,” (172) という描写に表現されている。結局、Joの意地と反抗もMarch家の窮地を救うことはできなかった。やはり、いつものように、March家の危機を救ったのは、Aunt Marchだった。

Bethが猩紅熱にかかり、Amyは家から隔離されAunt Marchの家に送られる。伯母宅に送られることを悲劇と思い込むAmyを、今回もAunt Marchはhospitalityをもって受け入れる。自分を悲劇のヒロインと思い込むAmyであったが、伯母の家での豪華な生活は彼女にとって心地よいものになり、その生活に順応していく。自分も金持ちになった気分を味わいそれを幸せと考えるAmyを、Aunt Marchも気に入って親しみを感じ気持ちを託していく。

惨めな贈り物が全くなかったクリスマスから一年たち、またクリスマスが近づいてきた。Bethの病気もよくなり、父の帰宅も近いと希望が見えていたこの年のクリスマスは“gift”にあふれていた。

Like sunshine after storm were the peaceful weeks which followed. The invalids improved rapidly, and Mr. March began to talk of returning early in the new year. Beth was soon able to lie on the study sofa all day, amusing herself with the well-beloved cats, at first, and in time, with doll's sewing, . . . Meg cheerfully blackened and burnt her white hands cooking delicate messes for “the dear;” while Amy, a loyal slave of the ring, celebrated her return by giving away as many of her treasures as she could prevail on her sisters to accept. (227)

Amyは伯母の家から満ち足りた気分で帰宅し“gift”を配り、病床にいるBethには家族から“gift”が渡された。Bethには高価な“gift”がMr. Laurenceから贈られ、姉妹は明るく幸せに満ちていた。そして、March家の食卓にはご馳走が並び、Laurence家が招待されている。さらに父の帰宅というサプライズが重なり、一年前と比較ができない程のクリスマスを迎えた。必要以上の“gift”が描かれているが、まるで今までの不均衡な“gift”のバランスを保つために付け加えられたように思える程である。Laurence家の“gift”はもちろん描写されているが、Aunt Marchへの“gift”が描かれていないのは不思議である。そして、家族全員が待ち望んでいた父の帰宅という最高の“gift”がMarch家に与えられて物語はクライマックスを迎える。しかし、“gift”によって幸せになったところでLouisaは作品を終えることをしなかった。Alcott家の未来の一頁を開くために、再びPart Iの最終章にAunt Marchが登場する。

AmyのおかげでAunt Marchの相手役から解放されたJoは、自由を得たことを喜び、自分の時間を執筆活動に費やす。父の帰宅で一家は幸せを感じているが、一人Joだけは、March夫妻から絶大な信頼を勝ち得たJohn Brooksの存在を危惧する。彼が密かに拾った姉の手袋を持ち続けていること、彼女に好意を寄せていること、そしてMegも彼に対して少なからず悪い気持を持っていないということについて、Joは言葉に言い表せない悲しみと怒りを抱いている。なんとかMegとJohnの結婚を妨げたいと思いMegを言い含める場面は、Joが自分の一家における役割が亡くなっていく寂しさも表しているといえる。“Thank you, Mr. Brooke, you are very kind, but I agree with father, that I am too young to enter into any engagement at present; so please say no more, but let us be friends as we were.” (237) とMegに言わせる練習をするほどである。しかし、Joの思惑通りにはいかなかった。MegとBrooksが結婚は時期尚早と話し合い、時間をかけて結婚しようと話しているところにAunt Marchが訪問する。二人の様子に気がついた伯母は、いつものように嫌みたっぷりにBrooksをけな

す。

“Not yet. I’ve something to say to you, and I must free my mind at once. Tell me, do you mean to marry this Cook? If you do, not one penny of my money ever goes to you. Remember that, and be a sensible girl,” (240–241)

高圧的な物の言い方といい、Aunt Marchの性格そのものを強調する場面である。彼女の攻撃的な対応にMegは思わず今まではっきりと表明することができなかった自分の気持ちをぶちまけて、Brooksとの結婚を決意するという笑いを誘う場面となる。LouisaはPart Iの最終章であるこの章で、Aunt Marchの性格を、“Now Aunt March possessed, in perfection, the art of rousing the spirit of opposition in the gentlest people, and enjoyed doing it.” (241)と分析し、彼女を滑稽な姿に描きそしてpantaloon役の彼女によってMegを未来へと導いていく。

さらにここでは、Aunt Marchの真実の姿も描かれている。彼女がMarch家を訪ねた理由を、“The old lady couldn’t resist her longing to see her nephew; . . .” (240)と、甥の無事の帰宅を心からの喜んでいる彼女の純粋な気持ちからだと説明し、さらにMegの結婚に対する彼女の説教がこれまでの嫌みだけではなく、伯母としての心配の気持ちがちにじみ出る描写としている。

“Now, Meg, my dear, be reasonable, and take my advice. I mean it kindly, and don’t you want you to spoil your whole life by making a mistake at the beginning. You ought to marry well, and help your family; it’s your duty to make a rich match, and it ought to be impressed upon you.” (241)

Aunt Marchの考える幸せとMarch家の姉妹がとらえる幸せの概念がまったく違うことがわかるが、当時の一般的な結婚に対する概念はAunt Marchに近いものである。その社会的な規範に対して、Louisaは素朴であるがある種絵空事の幸せを主張しているといえる。皮肉にも物質的に恵まれない生活を送るAlcott家の現状では、LouisaはMegが手に入れた素朴な幸せをも得ることができない。

Aunt Marchは、

“Well: I wash my hands of the whole affair! You are a wilful child, and you’ve lost more than you know by this piece of folly. No, I won’t stop; I’m disappointed in you, and haven’t spirits to see your pa now. Don’t expect anything from me when you are married; your Mr. Book’s friends must take care of you. I’m done with you forever.” (242)

と捨て台詞を吐き、今後は一切の援助をしないと断言し March 家から帰って行く。Aunt March が見捨てた March 家は幸せに満ちあふれ、“the peaceful ways” (246) に導かれると描写されて Part I は終わる。実際 Louisa は、“your Mr. Book’s friends must take care of you.” (242) と伯母が言う “friends” が明るい未来を導いてくれないことを知っていたはずである。彼女は若い二人を見守る March 夫妻を “Father and mother sat together quietly re-living the first chapter of the romance which for them began some twenty years ago.” (246) と幸せいっぱい描写しながらも、二人を “unworldly as a pair of babies” (244) と Aunt March に批判させることを忘れていない。

Part I の最終章で Louisa は、March 家のこの上ない幸せを描きながらも、その幸せが真なるものなのか自問自答している。Aunt March のような “gift” をもたらす肉親がいなくても、家族が幸せになれるという理想は、Louisa の夢であったといえるかもしれない。

IV

So grouped the curtain falls upon Meg, Jo, Beth, and Amy. Whether it ever rises again, depends upon the reception given to the first act of the domestic drama, called “LITTLE WOMEN.” (246)

Part I の最後の言葉通りに、好評により Part II が執筆された。Part I の校正ゲラが来た時、Louisa は “It reads better than I expected. Not a bit sensational, but simple and true, for we really lived most of it, and if it succeeds that will be the reason of it...”²²⁾ の書き記している。Alcott 一家が物語と同じような人生を送ってきたことで真実味があると確信した様子がかうかがい知れるが、お金と名声を手に入れられるという予感を抱くことができたその瞬間、Louisa は *Little Women* Part II を理想の Alcott 家の姿に変えていくことを目指した。

November 1st. — Began the second part of “Little Women.” I can do a chapter a day, and in a month I mean to be done. A little success is so inspiring that I now find my “Marches” sober, nice people, and as I can launch into the future, my fancy has more play. Girls write to ask who the little women marry, as if that was the only end and aim of a woman’s life. I *won’t* marry Jo to Laurie to please any one.²³⁾

と日記に書き残しているように、Louisa は Part II により娯楽性を加味することにした。Part I で March 家との断絶を一方的に言い渡した Aunt March は、Part II でも依然としてへそ曲がり頑固な性格であるが、実は心優しい女性であることが何度も繰り返して語られる。

... Aunt March was rather in a quandary, when time had appeased her wrath, and made her repent her vow. She never broke her word, and was much exercised in her mind how to get round it, and at last devised a plan whereby she could satisfy herself. Mrs. Carrol, Florence's mamma, was ordered to buy, have made and marked a generous supply of house and table linen, and send it as *her* present. All of which was faithfully done, but the secret leaked out, and was greatly enjoyed by the family; for Aunt March tried to look utterly unconscious, and insisted that she could give nothing but the old-fashioned pearls, long promised to the first bride. (257)

反対した Meg の結婚の祝いに、Aunt March は新婚生活に必要なものを大量に贈り、さらに、約束通りに真珠を贈った。結婚式にも出席し、感激の涙を流し、さらには Mr. Laurence とともにダンスを踊り周囲を驚かせた。“she just tucked her cane under her arm, and hopped briskly away to join hands with the rest, and dance about the bridal pair,” (268) 帰り際 Aunt March は “I wish you well, my dear; I heartily wish you well; but I think you'll be sorry for it,” (268) と、心から Meg の今後を心配し、そして花婿には、“You've got a treasure, young man, — see that you deserve it.” (268) と慈しみと喜びを表して帰っていった。

Amy が Aunt March の恩恵を受けていくことで、Jo は彼女からの束縛から解放され、家庭教師や縫い物をしながら自立した生活を送る。父が帰宅しても働く様子は描写されず、一家の経済的状態が改善された様子はみられないのに、一家の生活は “gift” を求める生活ではなくなる。Meg が結婚し、Jo が自活し成長を遂げた後、Beth が死亡して、貧しいながらも姉妹で “gift” に憧れ、心弾ませながら幸せを共有していた Part I にあった家族の形は消えてしまった。

Beth の病気以来、Jo とは反対に Aunt March の生活に憧れる Amy は、当時の社会的価値観に沿って成長をしていく。

Jo と Amy の価値観の違いがバザーの手伝いの場面で明らかになる。

“I am willing to work, — it's for the Freedom as well as the Chesters, and I think it very kind of them to let me share the labor and the fun. Patronage don't trouble me when it is well meant.” (316)

素直に援助を受けると話す Amy とは反対に、Jo は、

“I don't like favors; they oppress and make me feel like a slave; I'd rather do everything for myself, and be perfectly independent.” (317)

「恩恵」を否定する。これによってJoは不評を買い、長年の夢であったヨーロッパへの旅行はAmyにその機会が与えられることになった。Amyへの“gift”は、社会的規範に沿った者にだけもたらされる“gift”であり、そのためか“gift”の送り主はAunt MarchではなくAunt Carrolになっている。AmyはAunt Carrolの同行者として選ばれたわけだが、もちろんAunt MarchがCarrol伯母にAmyとの旅行を勧め“I’ll supply the money,” (318)と付け加えていることから、Aunt Marchの意図がこのいきさつに関わっていることがわかる。しかし、LouisaはなぜAunt Marchではなく突然Aunt Carrolを登場させたのであろうか。

Part Iにおいて、返礼を伴わない“gift”、つまり親戚からの“gift”は、Aunt Marchからの援助という構図ができあがっていた。しかし、自分の髪を売って父のために25ドルを調達して伯母からの自立を試みたJoは、Part IIでは、Laurieと距離を置き、家族から離れ、家庭教師や縫い物をしながら自立し、新しい女性の姿を読者にアピールしている。そしてAmyの欧州旅行は“Patronage”として描かれ、Amyはそれを受け入れたと設定されているために、Aunt Marchからの“gift”をも拒絶したJoはこのPatronageをうけることができなかったのではないか。常に家族を想い、尽くし、そしてそのすべての責任を自分に課して、Bethの死後、幸せを模索するJoの姿は、まさしくLouisaを彷彿させるものである。思い通りにならない自分の生活を角度を変えて作品に投影して、Joの自立と幸せの達成を「娯楽性」をもたせながら強調するために、Louisaは、Joの自立を描く際に返礼の伴わない伯母—giftの構図を消す必要があったのである。March伯母をAmyへの“gift”の送り主にしなかったのは、LouisaがJoに期待する生き方と彼女の夢への実現のために彼女が必要と考えた最高のそして最後の“gift”をAunt MarchからJoに与えるためだったのである。

For a year Jo and her Professor worked and waited, hoped and loved; met occasionally, and wrote such voluminous letters, that the rise in the price of paper was accounted for, Laurie said. The second year began rather soberly, for their prospect did not brighten, and Aunt March died suddenly. But when their first sorrow was over, — for they loved the old lady in spite of her sharp tongue, — they found they had cause for rejoicing, for she had left Plumfield to Jo, which made all sorts of joyful things possible. (507)

“made all sorts of joyful things possible”と夢を可能にするPlumfieldがAunt MarchからJoへの最後のgift・遺産として贈られた。孤独で葛藤するJoの幸せは読者すべてが望む結末であり、遺産という不可抗力でありながらも説得力のある“gift”でJoが幸せを得ることで、物語は納得のいく結末を迎えた。*Ragged Dick*のようにself-made manを目指す人の努力は報われ、幸せが訪れるという筋は、アメリカの典型的な教訓でもあり、また遺産という公然と認められ、すべての矛盾を消し去ってしまう最後の手段によって娯楽性が強調されている。そしてこの特別な“gift”によって、Joと重なるLouisaの幸せも、Joの努力と葛藤の人生と同

様に正当化されることになる。

Louisaにとって、親戚・友人からの“gift”は生きていくための手段であった。それを頼りにしなくてはいけないのは、生活力のない父が原因であることをLouisaをはじめ周りの者すべてが知っていたが、その事実を事実と認めないことが娘Louisaのプライドであり義務であった。自分の誇りを保つためにも、父は尊敬すべき教育者・哲学者でなければならなかった。親戚からの金策に苦しむ母の姿を見続けたLouisaは、親戚からの“gift”には屈辱が伴うことを知っている。しかし、生きていくために“gift”が必要である。ならば、自分のプライドと義務を持ち続けながらもどうやってそれを受け入れ納得していくのか。友人がどれほどたくさんの物を与えてくれたとしても、それは必ずしも代価を伴うものであることを知っていたLouisaは、肉親だけがそれを補うことができると考えたのである。この考え方こそが、Louisaの自己肯定だったのかもしれない。

V

作品の成功でLouisaは金銭的な成功を手に入れた。それは同時に、一家のすべてをまかなう義務を負うことを意味している。依然として生活力のない父親、結婚しても金銭的援助が必要な姉家族、そして、絵の勉強をするためにヨーロッパへ留学し、一人娘Lulu²⁴⁾をLouisaに託して死んでしまった妹と、すべてが病弱なLouisaの肩の上ののっていた。作品の成功からLouisaは与えられる立場から与える立場へと変わっていく。晩年のLouisaの日記は、一族を支えている自負が誇らしげに書かれているが、女性として人間として、両親に振り回されていることにいらだちを感じていることがよくわかる。唯一、1870年からの2回目のヨーロッパ旅行²⁵⁾で、Louisaは家族から解放されて滞在を楽しむことができた。結局、“as I am needed”²⁶⁾と、家族にとって自分が必要であると帰国し、自らの病氣と闘いつつ²⁷⁾、家族のために作品を書き続けることになる。

1874年1月の日記に、

When I had the youth I had no money; now I have the money I have no time, and when I get the time, if I ever do, I shall have no health to enjoy life. I suppose it's the discipline I need, but it's rather hard to love the things I do and see them go by because duty chains me to my galley. If I come into port at last with all sail set that will be reward perhaps.

Life always was a puzzle to me, and gets more mysterious as I go on. I shall find it out by and by and see that it's all right, if I an only keep brave and patient to the end.²⁸⁾

思うように生きられない現実と、自分の義務を果たすことで自分の人生はどのような意味があるのだろうかとLouisaは考え、苦しんでいる様子が書かれている。

母が亡くなる前、弱っていく母を見て、“My only comfort is that I could make her last years comfortable, and lifts off the burden she had carried so bravely all these years.”²⁹⁾ と言っているように、母の屈辱と重荷をなくすために、“gift”をもらわなくてもよい金銭的な成功を求めたLouisaは、家族を牽引するために孤立した存在になっていく。つまり、皮肉にもLouisaの創作であるAunt Marchと同じ役割を演じることになった。Aunt Marchと同じように、Louisaは姪の成長を見守り、甥の結婚を素直に喜びながらも、やはり孤独であった。亡くなる直前の日記は、“Fine. Lonely day.”と何度も繰り返し記されている。そして、1888年3月2日、彼女の最後の日記は、

March 2

Fine. Better in mind but food a little uneasy. Write letters. Pay Ropes & 30, Notman 4. Sew. Write a little. L[lulu] to come.³⁰⁾

と、彼女の晩年の、「書き物をする、支払いをする、縫い物をする、そして姪に会う」という生活における義務と喜びが簡潔に書かれている。この日記を記した後、Louisaは昏睡状態に陥る。そして1888年3月6日、彼女の誇りであり、人生の重荷でもあった父Bronsonが死ぬ。しかし、彼女は父の死を知らないまま2日後、3月8日に55歳の人生を閉じる。最後の最後までLouisaは父という重荷から解放されることはなかった。Louisaの一生は、父を支える一生であった。生まれた環境と時代はLouisaに試練を与えたが、父権社会の中でそれに耐え、プライドを持って自立した道を歩き続けた。Louisaは返礼を求めない“gift”を与えることができる女性となったことで自分の一生を正当化することができた。そして*Little Women*の中で“gift”を与え続けることで孤独を補おうとするAunt Marchが描かれたことにより、LouisaをモデルとしたJoの素朴な幸せが逆に光り輝いて見えるのかもしれない。一人の女性としての幸せは得ることができなかつたかもしれないが、彼女の*Little Women*は100年以上も人々に素朴な幸福という無償の“gift”を与え続けている。

註

1) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women* (New York: Henry Holt and Company, LLC, 2009), p. 214.

2) Bliss Perry (ed.), *The Heart of Emerson's Journals* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1926), p. 102.

3) Ednah D. Cheney (ed.), *Louisa May Alcott: Her Life, Letters, and Journals* (Carlisle: Applewood Books, 2010), pp. 198–199.

4) Martha Saxton, *Louisa May: A Modern Biography of Louisa May Alcott* (London: Andre Deutsch, 1977), p. 3.

5) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 3.

- 6) Madelon Bedell, *The Alcotts: Biography of a Family* (New York: Clarkson N. Potter, Inc., 1980), p. 17.
- 7) Madelon Bedell, *The Alcotts: Biography of a Family*, p. 47.
- 8) Madelon Bedell, *The Alcotts: Biography of a Family*, p. 48.
- 9) The Old Manse は、1770年に R. W. Emerson の祖父が建てた家である。1834年、Emerson が移り住んだことで、この家は Transcendentalist の拠点となった。この家で彼は “Nature” を執筆している。1842-46年には N. Hawthorne が借りて住み、*Mosses from an Old Manse* (1846) に含まれる20あまりのスケッチや物語を執筆した。
- 10) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 46.
- 11) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 46.
- 12) Ralph Waldo Emerson, “Gifts” in *Essays by Ralph Waldo Emerson, Second Series* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1995), p. 161.
- 13) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 50.
- 14) cf. マルセル・モース『贈与論』有地亨(訳)(勁草書房、2008)。Marcel Mauss (1873-1950) は論文 “Essai sur le don” の中で、potlatch には「富によって授かる名誉、威信、マナ (mana) の要素」と「贈り物の返礼にはなすべき絶対的義務の要素」があると述べている。
- 15) 1840年春に Alcott 一家は Dove Cottage に移り住む。Dove Cottage は Edmund Hosmer から借りた家で、Bronson は家の隣の畑を耕す生活を送り、姉妹はこの期間、学校に通学した。Dove Cottage で過ごした日々は子供の頃の幸せな時であったと後に Louisa は語っている。
- 16) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 66.
- 17) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 89.
- 18) Harriet Reisen, *Louisa May Alcott: The Woman Behind Little Women*, p. 52.
- 19) Madelon Bedell, *The Alcotts: Biography of a Family*, p. 162.
- 20) The Louisa May Alcott Memorial Association/Orchard House, *The Story of the Alcotts and Orchard House* (2010), p. 21.
- 21) Louisa May Alcott, *Little Women; or Meg, Jo, Beth, and Amy*, Elaine Showalter ed., (New York: The Library of America, 2005), p. 7.
- Little Women* は Part I・II から構成されているが、Part I・II とともに引用及び作品への言及はすべてこの版に基づくものとし、以後、引用箇所には括弧内に頁数を示す。
- Little Women; or Meg, Jo, Beth, and Amy*, pp. 1-246.
- Little Women; or Meg, Jo, Beth, and Amy, Part Second*, pp. 247-517.
- 22) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott* (London: The Univ. of Georgia Press, 1997), p. 166.
- 23) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott*, p. 167.
- 24) 1878年 Louisa の妹 May はスイス人 Ernest Nieriker とロンドンで結婚し、翌年に Louisa May [Lulu] が誕生する。May は Lulu を出産後死亡したため、彼女の遺言により娘 Lulu (Louisa May) は、Louisa が育てることになり、1880年 Lulu は渡米する。1888年 Louisa が死亡すると、父と暮らすために Lulu はヨーロッパに戻り、1975年に死亡する。[Louisa May Nieriker Rasim]
- 25) cf. Louisa May Alcott & May Alcott, *Little Women Abroad: The Alcott Sisters' Letters from Europe, 1870-1871*, Daniel Shealy ed., (London: The Univ. of Georgia Press, 2008).
- 26) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott*, p. 178.
- 27) 南北戦争の篤志看護婦としてワシントンで働いた Louisa は、腸チフス性肺炎にかかり一時は危篤に

なる。腸チフスの治療として当時使われていたカロメルによって水銀中毒にかかりその後遺症で死ぬまで苦しんだ。

28) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott*, p. 191.

29) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott*, p. 206.

30) Joel Myerson & Daniel Shealy (eds.), *The Journals of Louisa May Alcott*, p. 334.